

『伊達日記』の歴史観と軍記物語

—天正十三年を中心に—

高 鳥 廉

はじめに

『伊達日記』は『成実記』という別称があるように、伊達政宗の重臣で一門でもあつた伊達成実の手による記録で、天正十二年（一五八四）十月から慶長五年（一六〇〇）までを対象範囲としている。^①もちろん、同時期に記されたものではなく、晩年の成実による記録という性格を割り引いて考える必要があるが、南奥地域の政治史や成実の動向を理解するうえで、当事者の記録は何物にも代えがたい重みがある。実際に、古文書の記述を裏づけるような記載も多く、これまでも『伊達日記』を用いた歴史像の復元が試みられてきた。^②『伊達日記』は、当該期の歴史像を把握するうえで貴重な情報を提供してくれる。

ところで、『伊達日記』には類本がいくつかあるが、小林清治氏の検討によれば、『伊達日記』をもとにして全十二卷に整備されたのが『政宗記』である。『政宗記』は政宗の死去と葬礼の記事を含んでおり、政宗の死後、成実

が整備したものであるらしい。⁽³⁾ そうした経緯から、『政宗記』が『伊達日記』をいわば種本とするとはいえ、文言や記述方法には多くの相違点が認められる。⁽⁴⁾ 加えて黒嶋敏氏は、『伊達日記』で記されていた記述が、『政宗記』へと整備されていくなかで削除され、新たな記述が意図的に加えられていった箇所があることを論じている。⁽⁵⁾ また、『伊達日記』が書状の内容を部分引用するなかで、従来の表現から微妙に変化した箇所があることや、そうした性格をも有する『伊達日記』の記述・文言がさらに切り取られ、伊達家の正史たる『伊達治家記録』に取り込まれていったことも指摘している。⁽⁶⁾ これらの点に鑑みるならば、『伊達日記』や『政宗記』が著されたことの歴史的意味や、それらの記録が後世の人々の歴史観に与えた影響は、きわめて大きいといわねばなるまい。すでに松林靖明氏は、『伊達日記』の記述が後世の歴史書や軍記物語の記述の源流となっていることに注目している。⁽⁷⁾ この指摘もふまえると、『伊達日記』や『政宗記』と、後世に編まれた歴史書や軍記物語の記述を確認し比較検討することは、歴史観の変容過程を解明するうえで重要な作業だといえよう。以上のような先行研究の成果を念頭に置きつつ、本稿では、成実が『伊達日記』を著し『政宗記』を整備したことによりもたらされた後世への影響を、『伊達日記』の序盤にあたる天正十三年の記述から検討していくこととする。

検討を進める前に、まずは『伊達日記』の著者である伊達成実について簡潔に整理しておこう。成実については、政宗を議論の主軸に据えるなかでしばしば注目されてきた。とりわけ、伊達家中において成実が果たした軍事的役割が注目されており、小林清治氏が政宗の伝記において、成実が片倉景綱とともに「軍陣の参謀」として活躍し、伊達家の勢力結集や他家に対する優勢確保に寄与したことに言及したのはその一例である。⁽⁸⁾

近年では、佐藤貴浩氏の一連の研究が、成実の動向や立場について詳細に論じている。それによれば、成実は

天正十三年ごろには父の伊達実元から家督を継承していたといい、伊達領の維持において、成実の「御覚悟」「御分別」こそが重要であると政宗から示されるような立場にあったという。伊達領国では軍事的に重要な境目に大身が配置されており、成実のものちに二本松城主としてその一角を占めたこと、実元と同様に近隣諸勢力との外交交渉に従事し、調略面でも重要な存在であったことを論じている。さらに、実元・成実のような活動を展開した一門がほかにみられないことから、伊達家中における成実の存在の大きさを読み取っている。⁹⁾こうした成実の立場については、佐藤氏の別稿や著書によってさらに補説され、戦国末期における成実の個別具体的な動向も整理が進められた。¹¹⁾氏の検討のほかにも、亘理伊達家に伝来した史料を用いて成実の生涯に迫った深澤智成氏の論考がある。¹²⁾

このように、成実の立場をふまえながら、テクストとしての『伊達日記』（および『政宗記』）とその周辺を検討するための環境は整いつつある。そこで本稿では、『伊達日記』の序盤にあたる天正十三年の記述を検討の対象とする。まずは、天正十三年における成実の動きと『伊達日記』の特徴について概観する。そのうえで、『伊達日記』や『政宗記』にみえる同年の小手森城合戦を素材に、テクストの変化や後世に編まれた歴史書および軍記物語への影響などについて考えることとしたい。したがって、本稿が、史実の解明というよりもテクストの変化を跡づけるところに力点を置いていることについては、あらかじめお断りしておく。

第一章 天正十三年における伊達成実と『伊達日記』

『伊達日記』の序盤にあたる部分の主な内容は、天正十二年十月になされた伊達輝宗から政宗への家督移譲、同年から翌年にかけての南奥の政治状況と、去就の曖昧な大内定綱の動向と伊達氏との対立、会津蘆名氏との手切れおよび伊達氏の南下政策、大内氏との交戦と小手森城合戦、畠山（二本松）義継による伊達輝宗の拉致、輝宗の死と畠山氏の滅亡、人取橋の戦いなどとなっている。本章では、既知の事実を多く含むが、天正十三年における伊達成実の活動について改めて概観し、天正十三年分の『伊達日記』の特徴について言及したい。

天正十三年五月以降、成実の動きが次第に活発化していく。『伊達日記』には、政宗から二本松周辺の状況について尋ねられ、現状を報告したことが記されている。これは、成実の父である実元が、隠居の身とはいえ二本松領近くの八丁目城にいたことが背景にあらう。また、「御前之人ヲ相除カレ」、つまり人払いをしたうえで軍事的情報の共有と相談を受けたことが記されている点は、成実の立場と自負を物語る記述としても理解しうる。

続いて注目されるのは、蘆名氏との合戦で、蘆名方に属していた猪苗代盛国の内応工作を政宗に献策し、これに取り組んだことである。盛国子息の盛胤が伊達氏への内応に反対したため実現しなかったものの、成実が盛国の要望を政宗に伝達し、政宗から許可の文書をとる手筈になっていたようである。佐藤氏は、成実が盛国の希望を聞いたうえで政宗の文書発給を約していることに注目し、複数存在する交渉回路のなかでも、高い家格を誇る成実が重視されていたことを指摘している¹³⁾。さらに氏は、成実が続く大内定綱攻めに向けても、もとは大内氏の配下であった大内蔵人と石井源四郎を用いて、大内方に属する刈松田城主の青木修理を内応させたことに

注目した。⁽¹⁴⁾ここでは、成実の動きを具体的に確認してみよう。

【史料①】『伊達日記』

同年七月初ニ米沢へ我等使ヲ上申候テ、猪苗代之義相違仕迷惑ニ存候。会津ニ御敵ハ無ニ御座一候間、大内(定備)備前ヲ御退治被レ成可レ然候。御尤ニ思召候ハ、大内家中ニ一兩人モ御奉公仕候様ニ可ニ申合一由申上候処ニ、会津へ御敵ハナク御入馬候間、四本松へ御出馬ト被ニ思召一候。御奉公ノ者候へバ、猶以可レ然候間、早々コシラへ可レ申由御意ニ候間、我等家中本四本松ヨリ罷出候者、大内蔵人、石井源四郎ヲ申付、カリ松田ノ城主青木修理所へ申遣候へバ合点申候間、知行ノゾミニ御判形申請越申候。(後略。傍線・波線・傍点等は高鳥による。以下同)

【史料①】によると、「大内の家中から一人でも二人でも伊達氏に内応させるよう調略を進めたい」(傍線部)という意向を示したのは成実であつたという。政宗は、「伊達氏に応じる者がいるならば、なおさらいつそうよいことだ。早々に取りかかるように」(波線部)と指示している。このように『伊達日記』は、成実の主體的な提案に基づいて調略が実行されたことを強調しているが、これを単なる誇張とみることは適切ではない。【史料①】にみえるとおり、成実自ら取り組んでいた猪苗代盛国の内応工作が失敗したことについて使者を通じて政宗に報告している。成実にとつて、大内家中に対する内応工作は、以前の失敗を挽回する好機でもあつたと思しい。また、佐藤氏も留意するように、成実が大内蔵人や石井源四郎などかつて大内氏の配下であつた人材を家中に取り込んでいたことは重要で、だからこそ成実は、青木修理への内応工作を提案できたと考えられる。

さらに注目したいのは、成実が青木修理の内応工作においても、「知行ノゾミ」を聞いたうえで政宗の「御判形」

（文書発給）を申請する態度をとっていることである（傍点部）。これは、猪苗代盛国の内応工作時と同様の動きであり、佐藤氏の指摘をふまえても、成実が調略面においてある程度の裁量を有していたことは間違いないだろう。

なお、当該期の『伊達日記』には、晩年における成実の「若年」観が滲み出ており興味深い。小手森城合戦でも大内方の「先手」を務めた畠山義継が、かねてより取り次ぎ窓口として「指南」の役割を担っていた伊達実元を通じて身上の保護を求めてきた。⁽¹⁵⁾ 実元が伊達輝宗にその旨を伝えたところ、それを聞いた政宗は義継の申し出に対して強硬な態度を示しながらも、領地の没収と人質の差し出しを条件に、二本松攻めを再考する姿勢も示した。義継は、輝宗のもとを訪れてさらなる「御託言」を述べたようであり、輝宗は政宗の陣屋を訪れて、家老衆らと談合している。ここでは、成実の姿勢に注目してみよう。

【史料②】『伊達日記』

我等若輩ニ御座候へドモ、此使我等親仕候ニ付、義継^{畠山}へノ御使可^{伊達}レ仕由輝宗公被^二仰付^一候。ケ様ノ大事ノ御使如何ノ由色々申上候へ共、頻ニ御意ニ候間、不^レ及^二是非^一ニ任^二御意^一候。（前後略）

【史料②】にみられるように、成実は、義継のもとを訪れる使者としての役割を輝宗から与えられた。これは、本件を実元が取り次いでいることを背景とするものである。天正十三年分の『伊達日記』の記述を考えるうえで興味深いのは、当時の成実が「若輩」であることから、畠山氏との交渉という重大案件を扱うことに躊躇している点である。同時期の『伊達日記』をみると、成実が「若輩」⁽¹⁶⁾に関して消極的な印象をもっていたことが窺える。政宗からその軍事的な働きぶりを褒め称えられた人取橋の戦いでは、「我等十八歳ニテ何ノ見当モ無^レ之候へ共、罷除候テモ可^レ被^レ討候。爰ニテ討ジント」も思っていたという。十八歳という若年ゆえに、「何ノ見当モ無^レ」い

まま奮闘したことを回顧しているわけである。

加えて、若々^{ささ}に対する消極的印象は、成実自身に関する記述以外にも確認することができる。例えば、青木修理が大内定綱によって人質にとられていた子息の「証人替」を実現すべく、定綱の家老の子である中澤九郎四郎、大内新八郎、大河内九郎を欺いて刈松田城に招き、酒で酔わせた中澤らを捕らえ人質にとった場面にも、若々^{ささ}に対する成実の印象が表れている。『伊達日記』には、「何モ若者共ニテ以後ノ分別モナク八月五日之晩刈松田へ罷越、(中略)三人ノ者共、刀脇指ハ被^レ取、何共可^レ仕様無^レ之候。ホダシヲ被^レ討カリ松田ニ居申候」と記されており、中澤ら「若者」を「分別」のできない存在として明確に位置づけている。

さらに、実元が政宗に対し、畠山義継との手切れは不要であることを言上した際の記述にも、「若輩故為^レ聞不^レ被^レ申候」という文言がみられる。なおこの箇所は、『政宗記』になると「汝^{（伊達政実）} 若年の身として、若き殿を諫め参らせ」⁽¹⁷⁾と、実元が成実に指示したという表現に改められている。さらに『政宗記』では、政宗の家督継承時の状況を「されば政宗は、若年より世にすぐれ賢き大将ならんと、家の者ども思ひけるにや、家督の砌り誠に隣国の大進衆、如何思はれけん、方々より祝儀の使者尋常ならず近国の領主縁を求め、内通其外書簡多し」というような、『伊達日記』にはみられなかった説明が加えられてもいる。ここからは、政宗が若年のころから優れた賢い人物であったことを強調しようとする、『政宗記』の積極的な意図を読み取ることができる。この点をふまえると、先にみた「汝^{（伊達成実）} 若年の身として、若き殿を諫め参らせ」という『政宗記』にみられる文言も、若年ゆえに実元の提言を聞き入れなかったという従来の政宗像を包み隠すべく、やや婉曲的に改められた新たな表現とみなす余地があるように思われる。このように、『政宗記』においては、意図的であるかそうであるかにかかわ

らず、『伊達日記』にみられなかった文言が追加された事例や、文言の改変がなされた事例があることに留意しておく必要がある。なお佐藤氏は、『伊達治家記録』は正史として編まれたために、もとなつた『伊達日記』に記載されている政宗の反応を記さなかつたと推定している。⁽¹⁹⁾それも一理あるが、上述のように、『政宗記』への整理段階で表現が改められたことをふまえると、やはり『政宗記』の存在が『伊達治家記録』の記述に影響を与えている可能性をも考慮せねばなるまい。次章では、天正十三年の小手森城合戦について記した複数の史料を素材に、テキストの変化について読み取つてみたい。

第二章 『伊達日記』『政宗記』が記す小手森城合戦

天正十三年に起こった小手森城合戦は、伊達政宗と大内定綱の軍勢（およびその援軍）が衝突した合戦で、伊達軍が女性や子どものみならず犬に至るまで撫で斬りを実行したとされる合戦である。⁽²⁰⁾大内定綱は、独力で家を維持することができず、周辺の戦国大名に従属しながら生き残りを模索するような不安定な存在であつたといふ。ところが、天正十二年末に至り、定綱の去就が引き金となつて伊達氏と蘆名氏との紛争が惹き起こされ、翌年には大内氏自身が伊達氏の攻撃に曝され、大内方の小手森城は落城するに至る。⁽²¹⁾

この小手森城合戦については、伊達成実の『伊達日記』に詳しい。合戦の当事者による叙述という点において史料的价值は高く、後世に編まれた他の歴史書に比べれば同時代性も認めうる。この点は、小林氏が成実による記録類を合戦に関する「根本史料」と評し、それらの史料に全面的に依拠しながら合戦の概要を論じたことから

も窺えよう。⁽²⁾以下では、小手森城合戦について記した複数の史料を検討しながら、記述の変容過程を跡づけつつ、成実が『伊達日記』を著したことの影響についても探っていきたい。小手森城合戦の概要については、小林氏をはじめ数多くの研究において概要が説明されているが、テキストとしての『伊達日記』を適切に理解するうえでも、以降に編まれた歴史書や軍記物語との比較検討を行なううえでも、最低限の説明が必要となろう。やや冗長となるが、関連する記述を引用し概略を示しながら検討を進めることとする。

【史料③】『伊達日記』

廿七日昨日ハマチ（留守政景）ニテ落居不レ申候ヘドモ、我等存分悪ハ有レ之間敷ト存、御意ヲモ不レ請、未明竹屋敷へ陣ヲ移申候間、伊達上野介我等ニ引続陣ヲ被レ申候ニ付、惣陣ヲ可ニ相詰一由被ニ仰付一惣人数ハ備ヲ立。夫兵者野陣ヲ懸候処ニ内ヨリ一人罷出、我等陣所へ小旗ヲ振招候間、人ヲ越タヅネ候ヘドモ石川勘解由ト申者ニテ候。我等家中遠藤下野ニ会申度ト申候間、下野ニ為レ会申候ヘバ、勘解由申候ハ、此城ニ小野主水、荒井半内ヲ始備（大内定綱）前近奉公仕候者共数多籠申候。通路ヲ被レ切落城程有間敷候間、城ヲワタシ小浜へ罷除度候。此段タノミ候由申候ニ付、御前へ使ヲ以テ申上候ヘバ、御弓矢ノハカ参候様ニト思召候間可レ被ニ相出一候。乍レ去小浜へハ被レ遣間敷候。伊達ノ内へ可ニ罷除一由御意候間、石川勘触（勘）由ヲヨビ出シ御意之通申候ヘバ、伊達へ罷除候事ハ命乞ニ候間備前切腹モ程有間敷候間、腹ノ供ヲ仕度候間、小浜へ被レ遣被レ下候様ニト申二付、又其通申上候ヘバ、是非小浜へ被レ遣間敷由御意ニ候間、遠藤下野門二重ノ内迄罷越申理候。勘解由本丸へ参御意ノ通申理候処ニ、御前ヨリ我等ニ御使被レ下、城内之者共コワキ事ヲ不レ被レ成候間、申度マ、ニ申候。御攻可レ被レ成候。本丸迄ハ落不レ申候共、城中ノ者共伊達へ引除可レ申候。早々惣手へ被ニ仰付一

候由御意ニ候間、不_レ及_二是非一城へ取付候条、下野モ漸内ヨリ罷出候。我等手ヨリ火付方々へ吹付候処ニ、何方ヨリモ火ヲ付押込候間、内ノ者共役所ヲ離未刻ヨリ御責、申ノ刻ニ落城申候。ナデ切ト被_二仰付一男女牛馬迄切捨、日暮候テ被_二引上_一候。(後略)

内容を整理すると、おおよそ以下のようなになる。大内定綱方の石川勘解由が成実の陣所に来て、成実家中の遠藤下野との面会を求めた。石川勘解由は、小手森城には小野主水、荒井半内ら定綱に奉公する者が多数いるが、通路を断ち切られてしまい落城寸前であるため、城を伊達方に明け渡し、小浜城に退きたい旨を伝えた。この申し出は、成実から使者をもつて政宗に伝えられ、政宗も城の明け渡しを了承したが、小浜への撤兵ではなく伊達領内への撤兵を条件とした。これを聞いた石川勘解由は、伊達領内への撤退は命乞いを意味するものだとし、もはや定綱の切腹も間近であるため、切腹の供のために小浜へ退きたいと改めて請うた。遠藤下野は、小手森城の門内に進み小浜への撤退は認めないという政宗の意向を伝達した。石川勘解由は本丸に戻り、籠城する者たちに政宗の意向を伝えたが、政宗は「城中の者どもは、伊達軍が、コワキ事」をしないために、身勝手な申し出をするのだ」として、成実に城攻めを指示している。成実は小手森城に火をかけて落城させることに成功し、伊達軍は政宗の指示により「ナデ切」を実行して引き上げた。以上が、『伊達日記』が描く小手森城落城の顛末となる。

次に、『伊達日記』をもとにして全十二巻に整備された『政宗記』の記述も概観しておこう。正確な成立時期を示すかどうかについては検討を要するものの、『政宗記』には寛永十三年（一六三六）、寛永十九年（一六四二）の奥書が確認されている。⁽²³⁾『政宗記』の記述は、その原形ともいうべき『伊達日記』の記述とどのような関係にあるのであろうか。

【史料④】『政宗記』巻一「小手森落城附青木修理証人替の事」

城中の者ども私なる申事、悪い口の奴原なるに、此城を平責にして、本丸までは不_レ落ども、手並の程を見なば、敵軍此方へ引除ん。さも有るときは腋の敵地へ聞のためなり。去る程に陣中へも、ふれ早責給ふとて旗本を出される。是に依て成実も城へ取付、其れより取廻し、鉄炮を掛け給へば、使の下野内より出兼、小旗を掉て御方の陣へ紛れ出、漸命助り、尔る後成実陣より火をかけ、れば、折節風強ふして方々へ吹付、敵思ひの外に役所はなれ、午の刻より取付、本丸共に落城して、撫斬にと宣ひ、方々横目を付られ、男女は云ふに及ばず、牛馬の類迄も斬捨、酉の刻に引取玉ふ。(前後略)

このように、一見すると内容自体に大きな違いはない。ただし、政宗が小手森城への総攻撃を決断した理由について記した傍線部の表現は、【史料③】の『伊達日記』の記述と比べるとやや異なっていることが解されよう。今一度『伊達日記』をみると、伊達軍が「コワキ事」をしないために大内方の城兵の言いたい放題を許してしまっているという現状をふまえ、政宗が強硬策をとったことになっている(【史料③】傍線部)。一方の『政宗記』では、身勝手な申し出をする城中の者たちを「悪い口の奴原」と断じて攻撃に移ったことになっている。恐らく、双方の史料は本質的に同じことを語っているものと推測され、表現こそ違うものの、そこに政治的な改変の意図を積極的に読み取ることは難しい。城兵たちの「悪い口」から身勝手な申し出がなされた、という意味で【史料④】傍線部を理解するならば、『伊達日記』と『政宗記』の記述に大きな差はないといえよう。

ただし、『伊達日記』は『政宗記』とは異なり、身勝手な申し出をする城中の者たちを「悪い口の奴原」と明確に位置づけているわけではない。そうすると、『政宗記』の記述は、城兵たちによる政宗への「私なる申事」は

「悪」であつた」というだけではなく、そこから転じて、城中の者たちが政宗に対し「悪」とみなされる発言（悪口）をした」という文脈で理解される余地を残す記述になつてしまつてもある。上述のように、当該箇所についていえば、『政宗記』が明確な意図のもと意味合いを変えたとは思われない。推測するに、『政宗記』でやや異なる表現を用いた結果、異なる解釈の余地を残す叙述になつてしまつた、というのが真相であるように思われる。

些末な問題に思われるかもしれないが、この記述の微妙な変化は、後世の歴史書や軍記物語にも何らかの影響を与えた可能性がある。次章では、『伊達日記』および『政宗記』以降に成立した歴史書や軍記物語を素材に、城兵の発言について改めて検討してみたい。

第三章 小手森城合戦における城兵の「悪口」考

第一節 『会津四家合考』と『奥羽永慶軍記』

前章で整理したように、小手森城の兵たちの発言は、政宗によつて身勝手な申し出と断じられた。特に『政宗記』は、そうした発言をする城兵たちを「悪い口の奴原」と評し、この記述が、政宗に対し城兵たちが悪口を吐いたという、さらに踏み込んで解釈しうる余地を残したと思しい。実際に、城中の者たちが政宗に対して「悪口」を吐いたとする後世の史料が存在する。会津藩の向井吉重が著した『会津四家合考』（寛文二年（一六六二）成立、延宝元年（一六七三）清書）²⁴の該当部分を引用してみたい。

【史料⑤】『会津四家合考』巻之一「小手森の城落つる事附大内備前、四本松城を落つる事」

政宗同心伊達なれば、下野、事石川の叶はざる由を、勘解由に返答す。是に因つて、城石川中の者共腹立して、口々に悪口す。此由を聞きて、政宗、以の外怒られ、所詮城を蹂躙して、一人も残さず薙捨てよとて、其儘、大勢にて城を取巻き、噓と鬨を作り、鉄炮を打立て、喚き叫んで攻めけるが、成実伊達が陣より、如何はしたりけん、城中の役所に火を懸けたり。折しも吹く風烈うして、余焰十方に飛移りければ、煙に迷ひ、周章で騒ぐ処を、透間あらせず、四方より同時に攻入り、牛馬の類迄も、生命ある程の物をば、一つも残さず薙捨てけり。其日の午の刻より城を攻めて、酉の下りに及びて、寄手勝鬨を作つて引きければ、樵山に籠りたる者共も、如何は思ひけん、夜半に紛れて落ちて行く。(前後略)

『政宗記』よりもあとに成立した『会津四家合考』によると、遠藤下野により、政宗が小浜への撤退を許さなかったことが石川勘解由に伝えられた。これを聞いた城中の者たちは腹を立て、口々に「悪口」を吐いたという。そして、城兵らが自身に対する「悪口」を吐いたことを聞いた政宗は大いに怒り、城攻めを決意した、という文脈になっている。『会津四家合考』の記述は、どちらかというと『伊達日記』よりも『政宗記』と親和性があり、内容に同一性も認められる。例えば、『伊達日記』が城攻めの時刻を「未刻」とするのに対し、『政宗記』と『会津四家合考』はともに「午の刻」としている。また、『伊達日記』が引き上げの時刻を「日暮」とやや曖昧に表現する一方、『政宗記』と『会津四家合考』は明確に「酉の刻」「酉の下り」としており、時間帯こそ大差ないものの、表現にはやはり『政宗記』と『会津四家合考』に親和性が認められる。

当該部分の記述内容に鑑みると、『会津四家合考』は『政宗記』を少なからず参考にしたとみられる。そこで考

えられるのは、『会津四家合考』にみえる「悪口」が、『政宗記』にみえる「悪い口」文言を下敷きにしながら拡大解釈され変形された可能性についてである。むしろ、『政宗記』の「悪い口」文言が『会津四家合考』の「悪口」文言として直接的に継受されたと断定することはできない。しかし、二つの史料に認められる親和性をふまえるならば、その可能性は十分に認められるのではなからうか。

そして、『会津四家合考』よりもあとの元禄十一年（一六九八）、久保田藩（秋田藩）の戸部正直によって編まれた『奥羽永慶軍記』⁽²⁵⁾には、いかにも軍記物語らしく、大内方の荒井半内による「悪口」の内実に迫るような具体的台詞が記されている。

【史料⑥】『奥羽永慶軍記』巻八「小手森落城の事」

遠藤下野守、城中まで来ていふやう、^(編輯出)「石川殿の申さる、やう、大將聞き給ひて、^(伊達政宗)

り。去ながら、小浜へのきて、敵の大勢にしては、味方の弱くなれば叶はざる間、城中の者どもに異見して、伊達へのかせよ。」と申され候間、何れをも助度存ずる故、参り候。」と、さまざま異見をすれば、荒井半内といふ者、進み出で、「政宗公は城中の者を禽獸にひとしく、ただ命ばかりを惜むものと思召し候哉。全く其義にあらず、とても死すべき身なれども、同じくは主と一所に死なん事を思ひ候てこそ、かくは申つれ。小浜の訴訟叶はざる上は、敵を待つのみなり。遠藤殿も早く御帰候らへ。政宗公の旗本にて、最期の戦、花やかに仕り見せ申さん。」と、詞放ていひければ、遠藤も力及ばず立出で、此由を申せば、政宗聞給ひて、「さらば急に攻よ。」と陣中に下知し給ふ。（前後略）

『奥羽永慶軍記』は、政宗に「城中の者ども」の小浜帰還を許す気がないことを知った荒井半内をして、「政宗公

は、我らを禽獸のごとく命ばかりを惜しむ者と思われているのだろう。我らはまったくそのような者ではなく、主である大内定綱と運命をとにもするために、小浜への撤退を申し出ているのだ。それが許されない以上は、一戦交えるのみだ」と語らせている。

『奥羽永慶軍記』には「悪口」という文言こそないものの、荒井半内の発言が、政宗の側からすれば自身の人格を疑われるような内容であり、挑発的な内容を含んでいることは間違いない。そして、政宗の攻撃命令は、こうした荒井半内の発言をうけて出されたことになっているのである。これもまた、記述内容の継受関係ははっきりしないが、『会津四家合考』にみえる「悪口」が『奥羽永慶軍記』によって具体化されていることは、『伊達日記』や『政宗記』のテクストの利用と変容を考えるうえで興味深い事例といえよう。

第二節 エスカレートする「悪口」の内容——『檜原軍物語』——

さらに、明確な成立時期は不詳ながら、『会津四家合考』や『奥羽永慶軍記』の成立時期とさほど隔たらない時期に編まれたと思しき『檜原軍物語』（享保八年（一七二三）以前に成立⁽²⁶⁾）にも、城兵たちの「悪口」に関する記述がある。ただし、『檜原軍物語』が記す「悪口」は、『会津四家合考』や『奥羽永慶軍記』の内容と趣を異にするため、史料の記述を確認してみたい。

【史料⑦】『檜原軍物語』巻第三「仙道小手森城軍事^付大内備前落四本松事」

政宗得^(伊達)心ナカリケレバ城中ノ者共腹立シテ散散ニ嘲弄ス。政宗ハ所詮城ヲ急ニ揉落セトテ、寄手ノ大勢城ヲ稲麻竹葦ノ如ク取巻テ鯨波^{トキ}ヲ作り鉄炮ヲ打立喚キ叫デ攻ニケリ。城内ノ者トモモ死狂ニ働キケレバ左右ナク

ハ不レ被レ破既ニ晩景ニ成シカバ、今日ハ落ツマジカリケルゾトテ寄手引退カントス。斯ル^ハ處ニ敵方ニ琵琶ノ旗間近ク見エケレバ、城中ヨリ政都々々其持セタル琵琶ヲ引テ聞セヨト高聲ニ呼テ同音ニ咄トゾ笑ケル。是ハ政宗片目ニテ有ケレバ盲目ノ名ニ取成テカク悪口シタリシナリ。政宗是ヲ聞テ大ニ怒リ、此城忽チ攻落シ女童ハ云ニ不レ及六畜ノ類迄生命アラン程ノ者皆打殺セト下知シテ自ラ前マレケレバ、寄手共氣ヲモ不レ繼立ツ。成実ガ手ヨリ城中ノ役所ヘ火ヲ懸タリケルニ、折節風烈ク吹テ余焰十方ヘ飛移リケレバ、煙ニ迷ヒテ遽譟^{伊達}処ヲ政宗ソレ政都ガ撥ヲ当ヨト旬ラレケレバ、透間モナク四方ヨリ同時ニ攻入、牛馬鶏犬ノ類迄不レ殘皆難捨テ勝鬨作テ引返ス。(前後略)

政宗が城兵たちの小浜帰還を認めなかったことは諸史料と共通しており、城兵たちが「腹立シテ散散ニ」政宗のことを「嘲弄」したというのは、まさに城兵たちによる「悪口」を示すものにほかならない。ただし、『檜原軍物語』の独自性は【史料⑦】波線部にある。大内軍の抵抗に遭った伊達軍が、当日中の落城を諦めて一時的な撤退を決めた。すると、敵軍のなかに琵琶の旗印を確認した城兵は、城のなかから「政都^{まさいち}よ、その持っている琵琶を弾いて聞かせてみよ」と呼ばわり、城兵たちは大いにそれを笑った。ここでは、城兵たちが隻眼の政宗と目の見えなかった「政都」なる人物を結びつけ政宗に対して「悪口」した、という設定になっているのであり、これに怒った政宗が小手森城攻撃と撫で斬りを命じたことになっているわけである。⁽²⁷⁾

この波線部の記述は、これまで検討してきた諸史料にはみられない内容となっており、【史料⑦】が『物語』であることをふまえても、史実とみなすことは難しい。とはいえ、ここで留意しておきたいのは、『伊達日記』の内容とは異なる新たな記述が、軍記物語を中心にして新たに形成されていたという事実である。これを、軍記物

語の獨創性が表出したものと評価することはたやすい。しかし、こうしたことが起こり得た背景の一つに、『伊達日記』の内容をもとに『政宗記』が整備される過程で、表現が変えられたり文言が追加されたりしたことの影響もあるのではなからうか。『政宗記』が、『伊達日記』にはなかった「悪い口の奴原」という文言を組み込んだことは、軍記物語に新たな記述を生成させる素地を提供した可能性が高い点で、後世の歴史観形成に存外大きな影響を与えたのではないかと思われるのである。次章では、近世における伊達家側の認識について、伊達家側の史料をもとに少しく検討してみたい。

第四章 近世伊達家の認識と各史料の相違点

では、江戸時代において、伊達家側は城兵らの「悪口」をどのように認識したのであろうか。上述のように、『伊達日記』には「悪口」の記載自体が存在せず、『政宗記』には「悪い口」の文言こそあるものの、それは「私なる申事」すなわち身勝手な申し出を指しており、「悪い口」は必ずしも政宗に対する侮蔑的な「悪口」を意味しない。なお、政宗の事跡に関する公式記録ともいべき『貞山公治家記録』²⁸⁾も、荒井半内ら城兵の「悪口」について記していない。

【史料⑧】『貞山公治家記録』卷之一

因テ下野、^(遠藤)城門二重ノ内マテ行テ勸解由ニ此由ヲ報ス。時ニ^(石川)公ヨリ成実^(伊達)ヘ御使ヲ以テ、厳ク攻メ給ハサル故ニ、城中如レ此ノ自由ヲ申出ス、早々攻メラルヘシ、本丸マテ落城セハ、城兵伊達ヘモ引退クヘシ、此

旨諸備へモ命セラル由仰遣サル。成実即ち城へ攻懸ケ火ヲ放ツ。山城ナル故早速吹上ケ、所々ニ火移ル。総手ヨリモ推懸ケ火ヲ放ツ。因テ城兵役所ヲ離シ、度ヲ失へリ、午刻ヨリ手始メシ、申刻ニ至テ本丸落城ス。男女八百人許リ、一人モ残サス目付ヲ附テ斬殺サル。

このように、『貞山公治家記録』はあくまで『伊達日記』や『政宗記』をもとに叙述しており、伊達家側の史料では、城兵らの「悪口」について一切記していないことになる。⁽²⁹⁾ 実は、伊達家側の史料と『会津四家合考』『奥羽永慶軍記』との相違点の一つに、成実家中であつた遠藤下野の動向に関する記述を挙げることができる。『伊達日記』によれば、政宗の攻撃命令が出たときも、遠藤下野は小手森城中にあつて交渉を続けていた。それは、成実が城攻めに取りかかった段階で「下野モ漸内ヨリ罷出候」と記されていることから明らかである（史料③）波線部）。『政宗記』も「是に依て成実も城へ取付、其れより取廻し、鉄炮を掛け給へば、使の下野内より出兼、小旗を棹て御方の陣へ紛れ出、漸命助り」と、遠藤下野の劇的な帰還を描出している（史料④）波線部）。『史料⑧』の『貞山公治家記録』は、遠藤下野が城内へ入り石川勘解由に政宗の意向を伝達したことを記しているものの、遠藤の脱出記事は省略されている。とはいえ『貞山公治家記録』も、『伊達日記』や『政宗記』と同様の立場をとっているとなしうる。以上を要するに、伊達家側の史料では、交渉途中で痺を切らした政宗が、先手を打って攻撃命令を出したことになるのである。すなわち、遠藤下野は城内にとどまったままであるため、仮に城兵らが具体的な「悪口」を吐いたとしても、遠藤はそれを政宗に伝達しようがない、ということになる。

その一方、『会津四家合考』では、政宗が「此由」（城兵らの「悪口」）を聞いて攻撃命令を出したことになる（史料⑤）波線部）。政宗と石川勘解由のあいだを実際に取り次いだのが遠藤下野であつた点はこの史料も

共通しており、「此由」を政宗に報告し得たのは遠藤下野（ないしその主人たる成実）を措いてほかにまい。そして『奥羽永慶軍記』では、荒井半内の政宗に対する「悪口」ともとれる最終通知と「遠藤殿も早く御帰候らへ」という発言をうけた遠藤下野が城内から「力及ばず立出で」て、「此由」を政宗に報告したため、政宗が攻撃命令を出したことになる（【史料⑥】波線部）。このように、史料の成立時期が下るにつれて、遠藤下野が間一髪で城内より脱出したという文脈から、遠藤下野が退城して城兵らの「悪口」を政宗に報告する文脈へと、変化していることが解されよう。『檜原軍物語』に至っては、遠藤下野の動向を具体的には記さないばかりか、城兵らの「悪口」が他史料に比して過激化している。『檜原軍物語』の段階では、遠藤下野が城内から劇的に帰還したという『伊達日記』や『政宗記』の記述は、もはやほとんど顧みられなくなってしまうのである。

ところで、本稿で言及してきた史料のなかでも、【史料⑤】から【史料⑧】については合戦の当事者以外が著した後世の史料であり、特に『奥羽永慶軍記』については誤りが多く、百年以上前の出来事にもかかわらず各登場人物の発言を明記するなど、独自かつやや疑わしい記述が目立つ³⁰⁾。そもそも、『奥羽永慶軍記』にみえる記事の信憑性については、古くから疑問が呈されてきた。かつて大島正隆氏が「『永慶軍記』の記述自身、甚だしい矛盾を冒して居る」ことを述べ、「まともな史料としての信頼を置く訳には行かぬ」と断じたのはその代表的な例といえよう³¹⁾。もちろん、「第一等史料ということのできないもの」としつつ、「失われた戦国奥羽史復元の意図のもと」編まれたものとして「注目に値する」と述べた高橋富雄氏の評価もあり、史実を反映している可能性も否定しきれないことには注意を要する。しかし、時代が下るにつれて、新たに成立する歴史書や軍記物語の記述が、その基礎的情報源と思しき『伊達日記』や『政宗記』の記述から次第に乖離し、さらなる尾鰭がついていく点は偶然と

は思われない。少なくとも、政宗が小手森城攻撃を指示した背景（「悪口」の有無）に限って言えば、やはり合戦の当事者であった成実が最初に著した『伊達日記』の記述に信を置くのが穏当ではなからうか。

おわりに

本稿では、『伊達日記』の記述を確認したうえで、後世につくられた歴史書や軍記物語との比較検討を行なってきた。その結果、伊達成実が『伊達日記』を著し、のちにそれをもとにして『政宗記』が整備されたことは、後世の歴史書や軍記物語の記述に大きな影響を与えていた可能性がきわめて高いことがわかった。具体的には、伊達政宗が小手森城攻撃を決断した背景についての説明が、身勝手な申し出を繰り返す城兵らの態度を確認した政宗が交渉決裂の判断を下したという趣旨から、城兵らが政宗への「悪口」を吐き、それを遠藤下野が政宗に報告したために政宗が激昂して攻撃を命じたという趣旨へと次第に変化していった点を指摘できる。そしてさらに、『奥羽永慶軍記』や『檜原軍物語』といった軍記物語に至っては、城兵らによる政宗に対しての「悪口」の内容が具体化され、大きく尾鰭がついていった。このようにして、小手森城攻めの歴史像は、次第に変容していったのである。

むろん、それぞれの記述に直接的な継受関係があるかどうかについては慎重に考える必要があるものの、『政宗記』の記述が後世の史料に影響を与えた可能性は高い。少なくとも、時代が下るにつれて、『伊達日記』の趣旨から乖離した説明がなされるようになるという事実は動かない。本稿では、そうした客観的事実の紹介が中心と

なったが、今後は天正十三年のみならず、さらに幅広い時期の記述を扱うことで、『伊達日記』や関連する諸史料の記述を比較検討する作業が求められよう。『伊達治家記録』にも、先行する史料の影響を受けたり、編者の解釈や判断が入り込んだりした箇所が確認されている。⁽³³⁾ そうした事実もふまえると、個々のテキストを比較検討する余地は、十分に残されているように思われる。この点の検討については、今後の課題として引き続き取り組んでいくこととしたい。

注

(1) 斎藤鋭雄「だてにつき 伊達日記」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第九卷、吉川弘文館、一九八八年) 二二四頁。本稿では、『群書類従』第二十一輯合戦部所収の『伊達日記』上・中・下を用いる(本稿の検討する記事については、『伊達日記』上を参照)。

(2) 以上で述べたような、『伊達日記』の性格をふまえて伊達実元・成実の活動実態に迫った代表的論考に、佐藤貴浩 A「伊達領国の展開と伊達実元・成実父子」(『戦国史研究』六五号、二〇一三年)がある。

(3) 小林清治校注『第二期 戦国史料叢書10 伊達史料集(上)』(人物往来社、一九六七年)『政宗記』の「解題」(一四四～一四七頁)。

(4) なお、『成実記』と『政宗記』とでは表現方法に少なからぬ相違点があることや、再編成の過程で物語化が進められたことについては、石田洵「摺上原合戦の物語化―『天正日記』『成実記』『政宗記』をめぐる―」(『東北文学の世界』一七号、二〇〇九年)で指摘されている。

- (5) 黒嶋敏「はるかなる伊達晴宗―同時代史料と近世家譜の懸隔」(遠藤ゆり子編『シリーズ・中世関東武士の研究 第二五巻 戦国大名伊達氏』戎光祥出版、二〇一九年、初出二〇〇二年) 七九―八九頁。
- (6) 黒嶋敏「伊達家の不祥事と〈大敗〉―人取橋の戦い」(同編『戦国合戦〈大敗〉の歴史学』山川出版社、二〇一九年) 二七九―二八三頁。
- (7) 松林靖明「戦国軍記における体験談―『伊達日記』と『山口道斎物語』―」(『中世の戦乱と文学』和泉書院、二〇一八年、初出二〇〇九年)。松林氏は、『政宗記』への増補者を「不明」としつつ、「成実自身の改作の可能性も否定できない」と述べている(四九六頁)。
- (8) 小林清治A『人物叢書 伊達政宗』(新装版、吉川弘文館、一九八五年、初刊一九五九年) 五四頁。近年では、菅野正道「伊達氏、戦国大名へ」(遠藤ゆり子編『東北の中世史4 伊達氏と戦国動乱』吉川弘文館、二〇一六年) 五七頁が、重臣の伊達成実や白石宗実らは「千人規模の軍勢を目前で動員・指揮できることから、内政(領国統治)にはほとんど関わることなく、対外的な軍事行動の面での活躍が期待されていた」と言及している。
- (9) 以上、前掲注(2) 佐藤貴浩A論文。伊達政宗書状(伊達五郎宛書状。「亘理伊達家文書」(仙台市史編さん委員会編『仙台市史 資料編10 伊達政宗文書1』仙台市、一九九四年、一〇八号)も参照。佐藤氏が成実の外交活動を論じるなかで触れた年不詳十一月二十九日付伊達成実書状(『佐竹文書』福島県編『福島県史 第7巻資料編2 古代・中世資料』福島県、一九六六年、文書(中世) 一四三―二八号)の発給年については、垣内和孝「天正一四年の二本松「惣和」と伊達政宗」(『伊達政宗と南奥の戦国時代』吉川弘文館、二〇一七年、初出二〇一一年)が天正十三年に比定し、二本松「惣和」において伊達実元・成実父子が果たした役割の大きさについて言及している。

- (10) 佐藤貴浩 B「戦国時代の伊達氏一門・家臣と領国支配」(南奥羽戦国史研究会編『伊達政宗―戦国から近世へ―』岩田書院、二〇二〇年)、同 C『奥州の竜』伊達政宗 最後の戦国大名、天下人への野望と忠誠』(角川新書、二〇二二年)。
- (11) 佐藤貴浩 D「伊達成実―南奥制覇に貢献した伊達家きつての猛将」(遠藤ゆり子・竹井英文編『戦国武将列伝―東北編』戎光祥出版、二〇一三年)。
- (12) 深澤智成「伊達成実について―『亘理伊達家史料』を中心に―」(『人文論究』(北海道教育大学函館人文学会)八二号、二〇一三年)。
- (13) 佐藤貴浩前掲注(2) A 論文、八―一一頁。
- (14) 佐藤貴浩前掲注(11) D 論文、二七一―二七三頁。以下、本件に関する氏の見解は、同論文を参照。
- (15) 本件および伊達成実の役割については、佐藤貴浩前掲注(2) A 論文、同前掲注(11) D 論文などを参照。伊達氏と畠山氏の交渉については、小林前掲注(8) A 著書、二九―三二頁、小林清治 B「二本松と畠山」(『戦国大名伊達氏の研究』高志書院、二〇〇八年、初出一九九九年)二五六―二八六頁に詳しい。小林氏は、伊達氏側の案を提示したのは政宗ではなく輝宗であったとするが、本稿では『伊達日記』の記載にしたがい政宗として理解しておきたい。
- (16) 伊達成実宛書状写(『亘理伊達家文書』(『仙台市史 資料編10 伊達政宗文書1』二九号)。詳細は、黒嶋前掲注(6) 論文を参照。
- (17) 『政宗記』巻二「二本松八丁目境和睦之事」。
- (18) 『政宗記』巻一「大内備前伊達被レ留事」。

- (19) 佐藤貴浩前掲注(10) C著書、五七～五八頁。
- (20) 小手森城合戦については、小林清治C「伊達政宗 小手森合戦の重み」(『中央公論』通卷一三二号、一九八二年)に詳しい。このほか、小林前掲注(8) A著書、二八～二九頁、同D「政宗家督相続の前提」(『伊達政宗の研究』吉川弘文館、二〇〇八年、初出一九九〇年)三〇頁、同E「青年政宗」(『戦国大名伊達氏の研究』高志書院、二〇〇八年)一三六～一三八頁、佐藤憲一「伊達政宗の素顔 筆まめ戦国大名の生涯」(吉川弘文館、二〇二〇年、初刊二〇一二年)二〇～二七頁、高橋明「会津急襲、塩松・二本松の合戦」(南奥羽戦国史研究会前掲注(10) 編著)六九～七〇頁、黒嶋前掲注(6) 論文などを参照。菅野前掲注(8) 論文、五五頁にも若干の言及がある。
- (21) 以上、大内定綱については、高橋富雄『陸奥伊達一族』(吉川弘文館、二〇一八年、初刊一九八七年)六二～七〇頁、佐藤貴浩E「大内定綱の動向と伊達氏」(戦国史研究会編『戦国期政治史論集 東国編』岩田書院、二〇一七年)などを参照。定綱の伊達氏服属については、垣内和孝「服属の作法」(同前掲注(9) 著書、初出二〇一〇年)を参照。
- (22) 小林前掲注(20) C論文。引用部分は四六頁を参照。
- (23) 前掲注(3)に同じ。石田洵「奥羽地方戦国軍記覚書—天下統一期の軍記を中心にして—」(『東北文学の世界』一五号、二〇〇七年)も寛永十九年の成立としている。
- (24) 向井吉重著、黒川真道編『戦記資料 会津四家合考』(歴史図書社、一九八〇年、初刊一九一五年)。
- (25) 今村義孝校注『第二期 戦国史料叢書3 奥羽永慶軍記(上)』(人物往来社、一九六六年)。
- (26) 会津資料保存会編『会津資料叢書 上巻』(歴史図書社、一九七三年。該当部の初刊は一九一七年)。成立年代については、同書所収「奥州会津檜原軍物語」の「略解題」を参照。

(27) 小島一男訳『会津奥州檜原軍物語』（歴史春秋社、一九八一年）一八〇～一八七頁の解釈も参照。なお、「琵琶の旗」の関連記事として、『老翁聞書』（仙台叢書刊行会編『仙台叢書 別集第三卷』仙台叢書刊行会、一九二六年）慶長五年九月二十九日の記事に、「仙台勢」の武士と「琵琶の旗」に関する記事がみえる。上記『仙台叢書 別集第三卷』の「解題」は、『老翁聞書』の成立時期を、延宝～天和（一六七三～一六八四）ごろと推測している。

(28) 平重道責任編集『仙台藩史料大成 伊達治家記録一』（宝文堂出版販売、一九七二年）。

(29) なお、『片倉代々記』（巻之一、景綱）天正十三年閏八月二十七日条（白石市史編さん委員編『白石市史4 史料篇（上）』白石市、一九七一年）も、「此事」すなわち伊達領内への撤退を「再往に及て仰を不レ肯に因て」政宗から攻撃命令が出たとしている。

(30) 誤りの一例としては、永禄十一年生まれの成実の年齢を十六歳とするが、天正十三年から逆算すると、実際には十八歳である（本文中でも述べたように、『伊達日記』にも「十八歳」であったことが明記されている）。大石直正「おうえいけいぐんき 奥羽永慶軍記」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第二卷、吉川弘文館、一九八〇年、四四三頁）においても、「かなり雑然とした記述で、信頼しづらい記述も多い。多く先行の家史・戦記を材料としているらしいが、他の記録にみえない記述もみうけられる」と述べられている。『奥羽永慶軍記』については、石田前掲注(23)論文にも言及がある。

(31) 大島正隆「北奥大名領成立過程の一断面―比内浅利氏を中心とする考察―」（『東北中世史の旅立ち』そして、一九八七年、初出一九四二年 四六～四七頁。佐藤貴浩E「伊達政宗―戦国末期を鮮やかに彩った南奥羽の「覇者」―」遠藤・竹井前掲注(11)編著 二五五頁でも、「あまり信頼できる資料ではない」と評されている。

(32) 高橋富雄「奥羽永慶軍記の世界」(『高橋富雄東北学論集 地方からの日本学 第3部武士道 第11集 武士道の歴史 第2巻』歴史春秋出版、二〇一二年、初刊一九八六年) 五〇～五一頁。

(33) 松本直美「慶長・元和遣欧使節」の記録について―「貞山公治家記録」成立まで―(『成蹊人文研究』一号、一九九三年)、瀬川清人「慶長遣欧使節派遣時の再検討―『伊達治家記録』と『真山記』―」(『日本歴史』七一七号、二〇〇八年)。なお、こうした史料の性質に留意する必要性については、黒嶋前掲注(5)論文、黒田風花「伊達政宗当主期の意志伝達と家臣―茂庭綱元関係文書の検討を通じて―」(野本貞司・藤方博之編『仙台藩の武家屋敷と政治空間』岩田書院、二〇二二年) なども参照。